

カザン滞在記¹

桜間瑛(北海道大学大学院文学研究科博士後期課程)

筆者は2008年9月より、平和中島財団日本人留学生奨学生として、ロシア連邦タタールスタン共和国カザン市に滞在している。本文では、筆者によるこれまでの1年弱の滞在を振り返りつつ、当地での生活、研究環境などについて簡単に紹介したい。



カザン市は、モスクワから東におよそ800キロ、鉄道では夜行で一晩、飛行機なら約1時間半で着く距離にある。大陸型の気候で、近年は気温が上がっていると言われるものの、冬には-20度まで下がることも珍しくない。人口はおよそ110万人で、ロシア人とタタール人がおよそ半数ずつ、その他チュヴァシ人など100を超える民族が居住しているとされる。歴史的

に、スラブ・正教の西方文化とテュルク・イスラームの東方文化の接点をなしており、今日でもトルコなどとの文化交流が積極的に行われ、その独自の位置をアピールしている。

当地において、筆者はカザン国立大学に、タタール言語・歴史学部の研究員という身分で在籍している。カザン大学の場合、学位論文準備等の研究目的での研究員の受け入れを行っており、1年までの期間で申し込むことができる(期間の更新は可、料金など詳細については[大学公式サイト](#)を参照されたい)。筆者は4月に1年の予定で申込、書類の提出を行い(Eメールで可能)、6月にはヴィザ発給に必要な招待状を手に入れることができた。もっとも今回の場合は、以前に滞在経験のある長縄宣博氏の推薦があり、また正規の入学時期に重なる形であったため、例外的にスムーズに手続きが進んだと思われる。実際、2007年に筆者が短期の受け入れを依頼した際には、なかなか返事を受け取ることができず、結局カザン大による受け入れは断念することとなった。あるアメリカ人研究者も、短期での受け入れをここに対して依頼するのは難しい、と話していたことがある。

滞在中は受け入れ教官がつき、週1度80分の相談の時間を持つことができる。もっとも、希望すれば、この時間を語学などの個人レッスンの時間に振り替えることも可能である。筆者の場合、週1

¹ 以下の情報は、執筆した2009年6月時点のものであり、特に物価等については、大いに変動する可能性のあることをお断りしておく。

回分の追加料金を払い、タートル語の個人授業を2回受ける、という形にしている。文書館等で作業するために必要な推薦状などについては、大学留学課ないし所属学部に発行を依頼できる。

ここで、筆者は主に図書館・文書館での文献収集、村落等における聞き取りを中心としたフィールドワークを行っている。村落の生活についての話は別の機会に回すことにし、ここではカザンの主要な図書館・文書館の概要、および日常生活、そこから筆者の感じたところを紹介したい。

1. 図書館事情

図書館については、カザン大学附属ロバチェフスキー名称学術図書館²(以下学術図書館)、およびタタルスタン共和国国立図書館³(以下国立図書館)を利用している。

学術図書館には、ロシアで3番目に古い歴史を持つカザン大学の誇るコレクションが所蔵されている。特に手稿本を含む、帝政期の東洋学関係の書籍やカザン司教区を中心とする宣教活動関係の史料、沿ヴォルガ地域の諸民族に関する民族誌的文献が豊富に揃えられている。他方、近刊書については、モスクワなど他都市で刊行されたものもとより、地元カザンで発刊された本についてさえ、網羅しているわけではない。

利用に当たっては、証明写真と、カザン大学所属の証明書ないし所属先からの推薦状が必要。開館時間は月曜～金曜日が9時～20時(一部19時)、土曜日が9時～17時、日祝日・月末火曜日は休館日となっている。

基本的には、新館2階のカタログで必要な本を請求し、後におおよそ2時間後、午後3時以降の請求分は翌日11時以降)、指定の閲覧室で本を受け取ることになる。[電子カタログ](#)もあり、学生身分であれば事前のインターネット予約等もできるが、およそ90年代以降の書籍に限られる(これも網羅的とは言えない)ため、使い勝手はよくない。

専門書等の場合、主に戦後の文献であればカタログ横の1番の閲覧室、学位論文は4階の学位論文専用閲覧室、帝政期から戦前の希少本の類については、メインキャンパスの裏手、図書館旧館2階の10番閲覧室ないし手稿本・貴重書閲覧室に通されることになる。旧館はカバンや書籍の持ち込みは原則禁止(守衛の許可を得れば可能)。

どの閲覧室も基本的にPC、及びそのための電源の使用についての制限はない。また、1番・10番の閲覧室においてはデジタルカメラによる資料の撮影についても一切制限はない。ただし、学位論文専用閲覧室、手稿本・貴重書閲覧室においては、写真撮影は原則禁止である(書面にて

² Научная библиотека им. Н.И. Лобачевского Казанского государственного университета. Казань, Кремлевская 35. Тел./факс (843)264-47-34.

³ Национальная библиотека Республики Татарстан. Казань, Кремлевская 33. Тел (843)238-45-60.

申請の上、部局責任者の許可を得れば可能)。複写をしたい場合、新館であれば閲覧室で許可を取った上でコピー係に持ち込むことになる。1枚当たり2ルーブルで、それほど混みあっているということもない。旧館については閲覧室で依頼をし、そのまま資料を返却し後日コピーを受け取る。値段は、依頼する資料の発行年によって異なる。

国立図書館は、カザン大学のすぐ脇に位置している。建物は帝政期の豪商の邸宅がそれに充てられており、内装も含め非常に美しい作りになっている。使用に当たっては、特に推薦状などは必要ないが、図書館証の作成には、パスポート・証明写真のほか、80ルーブルが必要。開館時間は月曜～木曜日が9時～20時、土・日曜が9



時～18時であり、金曜日・祝日・月末水曜日は休館日となっている。本館一階の受付で図書館証を作成した後、カバン等を預け、2階にあるカタログで請求書を準備し、受付に請求した後書籍を受け取る。

もともと、カザンないし沿ヴォルガ地域関係の書籍の場合、本館と隣接した別棟にある地方誌館へ回ることになる。この地方誌館にも専用の書籍カタログがあるので、最初からこちらに入ってもいいだろう。その他新聞や貴重本の類については、やや離れたところにある別館に保管されており、そちらへ向かうことになる。

なお、国立図書館では、PCの使用は自由だが、カメラでの資料の撮影は禁止されている。こちらにも[ホームページ](#)内に[電子カタログ](#)がある。またこのHP上では、カザン千年記念祭の一環として、カザン市にまつわる文献のいくつかをデジタルカメラで撮影したものがアップされており、印刷することもできるので、一見の価値はある。

2. 文書館事情

筆者の使用している文書館には、タタルスタン国立文書館⁴がある。ここには帝政期からソ連期における、現タタルスタン共和国領内に関する史料が保管されている。カザンは、帝政期における東方異族人統治の一つの中心をなしており、宣教活動に関する史料等が保管されている(なお、スラ

⁴ Национальный архив Республики Татарстан. Казань, Наджми 20/12. Тел (843)257-86-80.

ブ研究センターの図書館に同文書館の[フォンドの目録](#)が所蔵されており、事前に大まかな史料の所在を知ることができる。大学から歩いて 10 分程度という便利な位置にあるが、裁判所の建物の裏手のくぼ地という入り組んだところに入があるので、最初は迷うかもしれない。

利用に際しては、所属先の紹介状が必要。筆者の場合、カザン大の紹介状を持って行った際、所長よりこの文書館宛のものでなくともいいから、日本での所属機関からの紹介状も見せてほしい、と言われた。必須ということではないのだろうが、予め双方用意しておくのが無難であろう。利用証は年が変わるごとに更新することになっているが、口頭で閲覧室の責任者に更新の意思を伝えれば、その場でサインをしてくれる。

開館時間は月曜～木曜日が 9 時～18 時、金曜日が 9 時～16 時 45 分。土日祝日、及び月末金曜日が休館日である。このアルヒーフは、閲覧室と史料の保管場所が別の建物になっており、毎週火/木曜日の午後が史料の運搬日になっている。効率よく作業しようと思う場合、この日程も考慮する必要がある(ただし、遅配もしばしばあり、史料によっては結局 1 か月近く待たされたものもある)。目録に関しても、別置されているものがあり、それらについても予約をして配送日を待たなくてはならない。

PC等の使用に当たっては、形式のみだが書面での申請が必要。また、電源を使用する場合一日 30 ルーブル(事前に数日分先払い)支払わなくてはならない。複写は、現状はA4 で一枚辺り 15 ルーブル、ドキュメントをいったんほどいでコピーする場合、さらに 1 ドキュメント当たり 30 ルーブリを請求される。2008 年中は、電源代は初回時に 50 ルーブルのみ、コピー代もA4 一枚 9 ルーブルであったが、2009 年になって急激に値上がりした⁵。今後も同様に急に値上がりなどのある可能性は十分にあるので、注意されたい。



ザールの係の方々是非常に丁寧に対応してくれ、本来昼の休憩時間(12 時～13 時)で、対応義務のない間でもこちらの質問などに応えてくれる。また、いろいろと融通も利かせてくれるので、利用者としては大変ありがたい。

⁵ なお、これらの値段はタタルスタン共和国内の文書館共通である。

3. カザンでの生活

ここからは、カザンの生活、そこから筆者の感じていることを綴っていこう。

第一に挙げられる点は、ロシア連邦内でも傑出した民族共和国の首都としての側面である。タタールスタン共和国は、ペレストロイカ以降、各地で「民族復興」が活発になる中でも、ロシア連邦においてそれが最も成功した例と見なされており、実際、現在に至るまで、特にその言語の復興に力が注がれている。90年代の末から2000年代初めにかけての、タタール語ラテン文字化の運動は失敗に終わったが、共和国内の公共機関等における2言語併記/2言語使用はかなり徹底している(なかには、先述のラテン語表記化の名残もみられる)。図書館でも、原則的に館員はロシア語/タタール語双方で対応できることが求められ、実際に利用者がタタール語で話しかけている場面は珍しくない。国立図書館の地方誌館などでは、むしろタタール語での会話の方が多く耳に入ってくる。

教育においても、タタール語での授業や、非タタール人も含めた生徒へのタタール語の教育が推進されている。2009年初めには、タタール語で教育を受けている生徒が大学受験において不利にならないよう、タタールスタン政府が共通国家試験(EGE)におけるタタール語での受験の認可を求め、連邦政府との間に論争が起こった(結局この要求は却下)。

また、タタールスタン共和国政府、およびその官製民族主義組織にあたる全世界タタール・コングレスなどは、タタールスタン領外に居住するタタール人への支援なども積極的に行っている。2009年度からはタタールスタン共和国政府が奨学金を出すという形で、新疆からカザンの高等教育機関へのタタール出自の学生の受け入れを行うというプロジェクトが始められた。

とはいえ、ここがあくまでロシア連邦の一部である、ということは紛れもない事実であり、言語に関してもカザン全体を見渡せば圧倒的にロシア語が優越である。タタール人自身の間でも、タタール語を知らない/自由には話せないという人は少なくない。また、話せるとしても積極的に話すことをためらう人々もおり、意識的にタタール語を使用している人々からは、「タタール人としての自覚がない」といった半ば憤り、半ば嘆きの言葉が聞かれる。教育においても、純粋なタタール人村落ですら、ロシア語で教育を行っている学校もある(タタール語学校と言っても、教材の不備などの問題から理系科目などでは結局ロシア語で授業を行わざるを得ない、という現状もある)。

さらに、一見タタール語の復興に努めているかのようなタタールスタン共和国当局と、タタール語の復興を目指すインテリ層との間にも、微妙な温度差が存在している。先に紹介した、新疆からの学生受け入れプロジェクトについても、それは伺える。これに参加していた筆者のタタール語の先生曰く、タタールスタンの文科省は自らこれに資金を提供しておきながら、最後の段階で各学生のヴィ

が取得に必要な書類への署名を渋り、そのために学生たちが数カ月をわたって不自由を強いられた、と不満を述べている。



他方、言語の復興と並んで、人々の宗教に対する意識の在り方の変化についても確認することができる。確かに 90 年代初頭のように、爆発的にモスクが増えるなどといった現象は見られないが、若年層も含めて、宗教に対する関心がじわじわと広まっているように見受けられる。筆者自身、カザンを訪れるのは今回が 4 度目になるが、毎回スカーフを被って通りを歩く女性やひげをたく

わえた男性の数が増えている印象を受ける。そうした印象は、実際にカザンに住んでいる人々の口にも上っている。しかし、特にソ連の無神論の時代を生きた年配の人々の口からは、こうした現象に対して、強い違和感・戸惑いといったものが感じられ、若い女性がスカーフをつけようとするのに、親が「若いうちからそういうことをするものではない」と反対するような例もある。

もともと筆者の知人で、パレスチナに滞在経験のある日本人が、「これほど個人主義的なイスラームは見たことがない」と言っているように、全体を眺めると、ここで見られるイスラームの姿はいわゆる原理主義的なイスラームという像からは程遠い。祭りなどでムスリム・タタールの集まる場においても、ウォッカを始めとする酒類や豚肉などは普通に供されている。また、タタルスタン政府も、過激な主張を行う勢力には距離を置きつつ、多民族・多宗教の共存する場としての位置づけを喧伝している。

とはいえ、個人的に話をする中では、時にムスリムの口から過去の改宗政策なども引き合いに出しつつ、ロシア正教への忌避感が露わになることはある。また逆に、イスラームは厳格に過ぎる宗教だ、という評価を下す正教徒の声があるなど、宗教間の潜在的な距離を感じることは決して稀なことではない。



経済に目を移すと、タタルスタン共和国は、領内の石油資源などを背景に連邦内でも経済的に恵まれた地位を維持してきた。98年の経済危機もなんとか乗り越え、2005年にはカザン1000年祭を祝い、それに伴うインフラ整備などで街全体が大きく様変わりを見せている。さらに最近では、2013年のユニヴァーシアードの誘致にも成功し、現在それに向けて新たな商業施設やホテルの建設／改装などを含む大幅な開発計画が進行している。また、1000年祭記念事業の一環として開通されたメトロも、拡張工事を続けており、2008年12月には6つ目となる新駅が竣工した。もっとも、これらの事業に対するカザン市民の反応は、どこまでこれらが役に立つのか、というやや冷めたものである。また、2008年からの金融危機の影響は確実にここにも至っており、新しい商業施設を見ても、テナントが撤退したり、そもそも埋まらなかつたりしており、がらんとした空間が増えてきているように感じる。

政治面では、連邦内においても、突出した存在感を示す地方政府の地位を維持している。プーチン政権以降、中央からの締め付けが厳しくなったことは間違いない。しかし、シャイミエフ大統領を中心とする現タタルスタン政府は、中央とうまく妥協しつつ、要所では、自身の意見を強く主張できる存在というポジションを維持している。

シャイミエフ自身は、すでに70歳を超える高齢で、健康不安説や死亡説も流れたことがあるが、依然タタルスタン内の主要な行事などには必ず顔を出し、その存在感を示している。確かに先述の一連のカザン開発事業を、ファミリー企業に請け負わせている、といった批判も時折聞かれる。しかし、タタルスタン、カザンの住民の総体的な評価としては、その発展に大いに貢献した、という側面から自分たちの「бабай(お爺さん)」として、肯定的な意見が多くを占めている。筆者のホームステイ先でも、「確かに悪いこともしてるけど、ああいう立場なら、誰だってそういうことはある。そのなかではよくやっている方さ」と評価している。実際、2009年3月の統一地方選では、シャイミエフを頂く統一ロシアタタルスタン支部は、約80%という、他地域の同党の結果と比べても驚異的な得票率で圧勝した(ちなみに次点はロシア共産党の11%、残りの公正ロシアとロシア自民党は、必要得票率を満たすことができず、議席を獲得できなかった)。この結果についてどこまで信用できるかについて、筆者自身は判断材料を欠くが、少なくとも「我々の政府」に対する一種の惰性的な支持が反映しているように思われる。

物価はおおよそ日本と変わらないか、若干安い程度と考えてよい。市内で部屋を借りる場合、もちろん場所などにもよるが15000ルーブル程度が目安かと思われる。これも場所によって、断水や停電があるが、そう頻繁でもなく、回復もそれほど遅くはない。食費については、外食の場合カフェ

などで昼食を取るのであれば 150 ルーブル程度だが、レストランがかった場所で夕食を取ると、優に 400~500 ルーブル程度はかかる。交通機関は、一律でバスが 15 ルーブル、トロリーバス、トランバイ、メトロが各 10 ルーブルになっている。市内を移動する場合は、バスかトロリーバスで移動するのが便利だろう。

治安状態は特筆するほど悪いわけではないが、表通りに当たるバウマン通りやペテルブルグ通りには、アンチ・ナチスを名乗る集団のデモ行動があったり、若者集団がたむろしたりしている場合があり、あまり近づかない方が無難と思われる。また、夜中・日中を問わず、通りで留学生が強盗まがいの被害に遭った、という話も耳にすることがあり、相応の注意はむろん必要である。

もともとカザン市内では、そうした犯罪行為以上に、通りを歩くこと自体に注意を払わなくてはならない。カザンは、ロシア国内でも特に交通事故の被害の大きい都市となっている。実際、ニュースを見ていると、ほぼ毎日どこかで死亡事故が起こっており、バスなどが巻き込まれているケースも珍しくない。もちろん、大きな理由としては、運転手のモラルの低さがあり、猛烈なスピードで飛ばしている車や、無理な車線変更などをしている場面にしばしば出会う。

それと同時に、道路インフラ自体の不備も一つの理由として挙げられよう。中心部をみても、表通りの信号の少なさなどには不安を感じる。こうした感想は、筆者が外部の人間として感じているのみならず、カザン市民の間からもしばしば聞かれることである。しかし筆者のしている限り、今のところの政府の関心は大規模な建設工事などに向いており、改善されていく見込みは強くない。こういったところには、いまだに開発・発展中心主義的な風が強く残っていることを強く感じさせる。

総じて見ると研究環境・生活環境ともに満足のいく場所であると筆者は感じている。大国ロシアの一部として、またユーラシアのほぼ中心に位置する町として、様々な様相を見せてくれる興味深い場として、ぜひ訪れられることをお勧めしたい。